

求めよ、さらば与えられん

主イエスはすでに「主の祈り」において（マタイ6：9～13）ご自身の弟子たちに「天の父よ」と神に呼びかけることを教え、思いわずらうことなく、単純に、この「天の父」に信頼して生きるところに信仰の本質があることを教えられたが（6：25～34）、今、「求めよ、さらば与えられん」で始まるこの有名な箇所（7：7～12）、この神信頼の真の姿ともいふべき「祈り」について大切ないくつかのことを教えておられる。

その第1は、祈りにおける忍耐強さである（ルカ11：5～13参照）。ギリシャ語原文では「求め続けよ」「探し続けよ」「門をたたき続けよ」となっており、どのような状況の中にあっても、決して気落ちせず、失望せず、思いわずらわず、希望をもって、忍耐をもって、信頼の心をもって、ちょうど幼子はその父親に何でも求めるように「天の父よ」に求めよ、との意である。そのように求めて生きるところに、キリスト者の祈りの特徴がある。

第2の特徴は、祈りの行動性ともいふべきものである。祈りは単にこちら側から神に一方的に語るだけで、あとは手をこまねいて待つばかり、というようなものではない。祈りには行動が伴うべきである。祈っていたその膝が立ち上がり、主の導きを信頼して、行動する。その行動性、積極性である。

祈りの人は積極的に行動する人である。主がここで使っておられる三つの言葉の発展性に注意しよう。「求めよ」→「探せ」→「門をたたけ」。祈り求める人は、立ち上がり探し求め、更に進んで門を叩き続ける人である。

第3に教えられることは、祈りにおける神への信頼性とでも言うべきものである。祈りは私たちの願いを神に押し付けることではない。私たちの求めるものが、何でもその通りに、自動的にかなえられるというようなものでもない。私たちが良いと思っているものでも悪いものがある。たとえば、小さい子どもがナイフを求めているからといって、ナイフを与える親はいない。ピストルを欲しがっているからといって、ピストルを与える親はいない。親は子どものことを考え、その最善となるように、最も良いと思われるものを、もっとも良いと思われる方法で与えるのである。

それと同じように、私たちの「天の父」なる神も私たちが何を必要としているかをご存知であるがゆえに、「神」としての知恵と「父」としての愛と配慮とをもって、私たちにとって最善となるように、最善となる方法で、私たちの祈りに答えて下さるのである。そのことを信じて、全幅の信頼をよせて神に生きる、これが祈りである。すなわち祈りは、私たちが求めるものを神に告げるのみではなく、神が私たちに求め給うものが何であるかを聞くことでもあるのである。